

第 22 回 現代に生きるヒポクラテス

近代医療における芳しくない事例報告をしばしば経験する。ごく最近も不妊治療における人工受精卵取り違えに加えて、禁止事項の恣意的な複数卵採取(わが国では原則 1 個の採卵に限られている)や、近視矯正のためのレーザー光線によるレーシック手術(角膜屈折矯正手術)を非衛生的環境下で行い、多数の重症角膜炎などの術後感染症例が発生したことなどの事例が報道された。このような種類の医療倫理を無視した様な事柄が最近とくに多くなったように見える。医療従事者におけるこれまでは考えられないような倫理観の希薄さが最近とみに感じられる。わが国の現在の医療事情からみて、医学教育や医療政策を大幅に改善しなければならないと考えている者は筆者ばかりではない。

ところで、医療人の倫理観はいまやグローバル化しており、これは史上最大級の医聖のひとりである古代ギリシャのヒポクラテスが医師の行いを規定し、医の倫理を説いた「ヒポクラテスの誓い」に大きく影響されているといえる。それは医学教育において現在でも欧米では医学に携わるものの心構えとして多くの医学部卒業式のときなどに朗読されるほどである。

ギリシャ語の直訳ではなくギリシャ語の英訳の日本語訳なのが気になるころではあるが、「ヒポクラテスの誓い」の全文は以下の通りである。

「医神アポロン、アスクレピオス、ヒュゲイア、パナケアおよびすべての男神と女神に誓う、私は能力と判断に従ってこの誓いと約束を守ることを。この術を私に教えた人をわが親のごとく敬い、わが財を分かって、その必要あるとき助ける。その子孫を私自身の兄弟のごとくみて、彼等が学ぶことを欲すれば報酬なしにこの術を教える。そして書きものや講義その他あらゆる方法で、私のもつ医術の知識をわが息子、わが師の息子、また医の規則に基づき約束と誓いで結ばれている弟子どもに分かち与え、それ以外の誰にも与えない。

私は能力と判断の限り患者に利益すると思う養生法をとり、悪くて有害と知る方法を決してとらない。

頼まれても死に導くような薬を与えない。それを覚らせることもしない。同様に婦人を流産に導く道具を与えない。

純粋と神聖をもってわが生涯を貫き、わが術を行う。

結石を切りだすことは神にかけてしない。それを業とするものに委せる。

いかなる患家を訪れるときも、それはただ病者を利益するためであり、あらゆる勝手な戯れや墮落の行いを避ける。女と男、自由人と奴隷の違いを考慮しない。

医に關すると否とにかかわらず他人の生活についての秘密を守る。

この誓いを守り続ける限り、私は、医術の実施を楽しみつつ生きてすべての人から尊敬されるであろう。もしこの誓いを破るならば、その反対の運命をたまわりたい。」

ヒポクラテスは、紀元前 460 年頃コス島で生まれ、370 年頃テッサリアで没したコス島の教師で、遍歴の医師といわれている。その教義がまとめられた「ヒポクラテス全篇」には環境を含めた総合的な患者治療が集約されており、当時原始的な医学から科学的な医学の発展に寄与したと評価されている。

紀元前 5 世紀から 4 世紀のギリシャに生きたヒポクラテスの教義が文化爛熟ローマ時代を経て、後年医師職の誓約の規範として定着し、現在に至ったことは注目に値する。これは、ギリシャの神々への誓いであることや、医学教育の徒弟制への言及や自分自身の将来の榮譽のための誓いであるということなどが含まれているものの、その主たる部分は医師が純粋に高潔さを保ちながらいかなる国や時代の人々も理想と考えるような医師としての振る舞いを行うことや、自殺や墮胎・避妊の手助けを禁止することなどで、ローマ時代の社会の倫理観に合ったばかりでなく、後世のキリスト教会の教義原則に一致したことで命脈を保ったといえる。ローマによる後世への産物は、一般的にギリシャ語・ラテン語による普遍的な世界文学、ローマ法という優れた法律を作り実践したこと、君主体制を作り上げてそれに関連した

周到な行政組織を作ったこと、キリスト教を世界宗教の支配的地位にまで高めたことなどといわれている。ローマ人は、例えば最初の数世紀の間、離婚という観念が存在しなかったといわれるほど歴史上希有なほどの厳格な道徳観念をもっていた。ローマ帝国はキリスト教が4世紀中葉に国教化された5世紀半ばかに滅亡への道を進むことになる。その後ヨーロッパ大陸は、近世にいたるまで世界史の主舞台となったといっても過言ではなく、歴史的出来事のつぼと化している。ヨーロッパ大陸の歴史を概観すると次のような経過を辿って近代にいたっている。それは、ローマ帝国への異民族侵入と帝国の滅亡、異民族国家の成立・発展とそれら国家のキリスト教化、イスラム圏の拡大・東西文明間の衝突と交流、法王権と世俗権の競合歴史の繰り返し、宗教改革とプロテスタントの成立、ルネサンス、宗教戦争、列強の成立と発展、革命による社会変革、産業革命、帝国主義の発展、世界大戦などである。近世に近くなるに従ってヨーロッパばかりでなく世界は必然的にグローバル化に向かい、キリスト教が根を下ろしたヨーロッパ主要国に広まった医療におけるヒポクラテスの教義もまたグローバル化したといっても過言ではない。

ヒポクラテスの教養の発展維持に貢献した医師のひとりにガレノス(129年-200年頃)がいる。幼少の頃ヒポクラテスの教義を学んだガレノスは、広範囲な医学分野の系統的、かつ膨大な著作を残したことで知られ、彼からおおよそ1500年間その名はヨーロッパの多くの国々で無謬の医学的権威として存在した。ガレノスの業績は多いが、それらのなかで現在も適用されている4種類の人間の基本的気質(多血質・粘液質・胆汁質・憂鬱質)の分類は興味深い。

キリスト教的倫理観に集約されているといっても過言ではない現代の医の倫理は、20世紀の2度の世界大戦を経て精緻化された。第2次大戦後のジュネーブ宣言(1948年ジュネーブにおける第2回世界医師会総会で採択、1968年シドニーにおける第22回世界医師会総会で修正)やヘルシンキ宣言(ヒトにおけるbiomedical研究に携わる医師のための勧告:1964年ヘルシンキにおける第18回世界医師会総会で採択、1975年東京における第29回世界医師会総会で修正)などに「ヒポクラテスの誓い」の源流を見ることができる。

世界的に受け入れられている医の倫理の考え方は、わが国でも定着していると思われるが、急速に発展する現在の医療においては残念ながら必ずしも実践されているとは言い難い。

患者の利益を優先させるということを基本にした医学教育や医療行政に強く反映させるための努力をしなければならないとつくづく思うこの頃である。

参考文献

アルバート・S・ライオンズ, R・ジョセフ・ペトルセリ: 図説 医学の歴史, 小川鼎三監訳, 日本ペーリンガーインゲルハイム社, アメリカ大統領委員会: 生命倫理総括レポート, 第1版第2刷, 厚生省医務局医事課監訳, 篠原出版, 東京, 1987年

レオポルド・フォン・ランケ: 世界史概観, 近世史の諸時代, 第49刷, 鈴木成高・相原信作訳, 岩波書店, 東京, 1990